吉野秀雄全集

第一巻

吉野秀雄全集

筑摩書房

吉野秀雄全集第一巻

昭和四十四年五月三十日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者　吉野秀雄
発行者　井上達三
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話　東京（二九二）七六五一（代表）
振替　東京　六－四一二三

印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替いたします

吉野秀雄全集第一巻　目次

天井凝視……七
天井凝視（初版）……三三
苔径集……八五
早梅集……一六七
寒蟬集……二三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

晴陰集……二九五
歌集目次……五一九
解　題……五三五

吉野秀雄全集第一巻　短歌Ⅰ

定本歌集　天井凝視

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正十三年

床上雑詠　一

氷枕(ひょうちん)に頭(かうべ)うづめて夕されば われをめぐりて蚊帳釣らせけり

夕されば引かする蚊帳のその裾のたまゆら触れつ熱高き頬に

氷枕(ひょうちん)に圧(お)されてゆがむわが眼鏡歪(ゆが)めるものをめづらしみ見つ

暮れなづむ窓にひびかふ蟬のこゑ明日(あす)もかくして病むにしあらむ

むら雀囀りやめて軒立てりけふも日照らむ朝明けぐもり

溲瓶(しゅびん)を油紙(ゆし)につつみて病床(やみどこ)のかたはらにならべわれはねむるか

小夜なかば溲瓶にはするわが尿のおとのかなしさにまなこつむりつ

夕立はいまかおそはむ目の前の松の高枝にひかりつめたき

夜に入りて夕立やみけり庭隈の植込みの中雫しやまず

あかときのしとれる風ははたはたと蚊帳をあふりつつ熱出でくらし

口のなかに昨夜の薬ねばりをり夢には病むを忘れたりしが

ひと夜さを背の疼きに堪へきたりいまし鶏の声遠く聞く

病みたふれ時の移るをくやしめりとみに秋づけるけさの朝雨

あらがへど父はいらへずややありて湿布換へむといひにけるかも

たらちねの母がなさけと滝のぼる真鯉の汁を食ひ足らひぬ

松が枝に雀が一羽あそびほけ糞たれゐるは見れど飽かぬかも

ひさしく見てをりしとき檐の端のふかき曇りをよぎる鳥あり

かくのごと夜半の枕に板のせて手紙を書くと人知らざらむ

病室の掃除のひまをいざり出て縁に浴びゐる朝日うれしも

肉親とかくて寄り寝るありがたさひとりめざめて寝息ききをり

高田川

ふるさとはかなしかりけり高田川水の腐れて鮠の子し跳ぶ

高田川水涸れはてて川床のおどろがなかにきりぎりす鳴く

百日紅の花

暮れおそき木立がくりのさるすべりすべこそなけれ憂へそむれば

けならべて熱高けれやさるすべりの花のさゆれもこころぐきかな

そのほかに見むものもなく荒庭(あれには)にただに真赤きさるすべりの花

わが病けながくもあるか塀ぎはのさるすべりの花既に見飽きたり

床上雑詠　二

ゆくりかに寒蟬(かんせん)なくや床(とこ)の上(へ)にわれひさしくを呆(ほ)けゐたるらし

その尻音(しりね)さみしく去(い)にし寒蟬に床辺(とこべ)にはかに夕づくをおぼゆ

昼の月消(け)ぬがに空をわたるときいのちひとむきに愛(を)しとおもへり

俄雨降るとみるみる松の幹すそ根にかけて濡れそぼちたり

おろかならぬ熱とは思へ日を経(ふ)ればこのごろ慣れてひとりわびしき

ひさびさに目覚めすがしき雨の音この日ひと日の安けさもがも

光り澄む空となりにけり植込みの高き木梢(こぬれ)を蝶わたりつつ

群雀(むらすずめ)檐端(のきば)をたちてみだれけり澄み徹(とほ)る空に強き風迅(はや)し

夜(よる)ふけて蚊帳を仰ぎつつものおもふならひ久しく秋づきにけり

荒れまさる雨の夜くだち遠空にひそやかに散れり街(まち)の灯(ほ)あかり

ちちろ虫耳にいちじるく街(まち)あかり雨夜(あまよ)を遠くにじむかなしさ

ひねもす心にとめて聴くからに雨は日増しに冷えまさるかも

痩す痩すも身はたふとまむいやほそる夜(よは)の虫が音(ね)なほも鳴きつげり

日にけに雨冷えゆけばなく虫のいまだ鳴く音もまぎれ消たるる

夜祭にうからそろひていでゆけり留守をまもりてうそさむし我は

檜葉の木の片面明りを飛び交ひて足つるしの蜂かすかなるかも

枕よりわが目のとどく畳には夜半のコスモスの影しづもりぬ

乾風ひねもすあらぶこのごろの身のおとろへをいなみかねたり

枕頭の菊

錦菊床のかたへに咲きあかるこのしづけさにねむりたらはむ

咲きよろふ菊のあかるさにうらなごみ命を惜しと人に洩らしつ

煮えたぎる湯沸しのおとに夜更くれば見のつらつらに大き菊かも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com